

明治期に創刊された民間統計団体の機関誌は？

奥積 雅彦（総務省統計図書館）

統計図書館では統計相談業務（調べもののお手伝いをするレファレンス業務）も行っており、今後におけるレファレンス業務を想定して明治・大正期における民間統計団体による統計や統計学に関する機関誌の出版等の公益活動について調べてみました。本稿では、その一端を紹介します。

1 明治期における民間統計団体による統計や統計学に関する公益活動

明治中期における統計や統計学に関する公益活動をみると、東京統計協会やスタチスチック社が統計や統計学に関する機関誌（統計集誌：明治13年創刊、スタチスチック雑誌：明治19年創刊）の発行、講演会の開催、統計データの収集などの公益活動を展開していました。明治29年（1896年）に新たに制定された民法により公益活動を展開する社団法人・財団法人の制度が創設される10年以上前から民間統計団体が統計や統計学に関する公益活動を展開していたことは注目に値すると思います。

2 「統計集誌」と「スタチスチック雑誌」¹

明治期に創刊された民間統計団体の機関誌は、「統計集誌」（東京統計協会²）と「スタチスチック雑誌」（スタチスチック社³）で、これらは、統計に関する専門誌といえると思います。ちなみに、両誌は昭和6年（1931年）に日本統計学会が創設される約半世紀前に刊行を開始したということになります。そして、これらの雑誌のDNAは、現在の月刊誌「統計」に引き継がれています。

（⇒【別記】月刊誌「統計」の系譜）

3 我が国で最初の統計学会は？

島村史郎「日本統計発達史」によれば、表記学社（のちにスタチスチック社→統計学社に改称）は、「我が国で最初の統計学会⁴あるいは統計協会」であるとしています。

¹【参考資料】島村史郎「日本統計発達史」、月刊誌「統計」2019.4月号～7月号の「月刊誌「統計」のルーツのはなし」

² 東京統計協会：杉亨二を中心とする統計の先駆者たちが明治11年（1878年）に創設した製表社が前身。明治12年に統計協会創設。明治13年^{11月}に「統計集誌」を創刊。明治14年^{3月}に刊行の「統計集誌」第2号から表紙のクレジットが「統計協会」から「東京統計協会」へ改称。同協会は、「統計集誌」の刊行のほか、統計を広めるための講習会・講話会の開催など啓蒙活動を行うとともに、何度も政府や貴族院、衆議院に国勢調査の建議・陳情を繰り返し、実施に大きな貢献をした。明治35年に社団法人に。昭和19年（1944年）に統計学社と合併して財団法人大日本統計協会へ、昭和22年に財団法人日本統計協会へ改称。平成25年（2013年）に一般財団法人に移行。（総務省統計局HP等）

³ スタチスチック社：明治9年（1876年）に杉亨二が設立した表記学社を明治11年にスタチスチック社へ改称。統計学の講義を開き、外国の論文の訳本を発刊、「スタチスチック雑誌」を創刊するなど統計の普及に尽力。明治25年に統計学社へ改称。昭和19年（1944年）に社団法人東京統計協会と合併して財団法人大日本統計協会へ、昭和22年に財団法人日本統計協会へ改称。平成25年（2013年）に一般財団法人に移行。（総務省統計局HP等）

⁴ 前掲の日本統計学会は、「日本における統計学・統計科学では最古で最大の学術団体」（日本統計学会創立75周年記念出版、2012年増補HP版「21世紀の統計科学< Vol. I > 社会・経済の統計科学」）とされています。ただ、明治期において学会の要件が定められたものがあるわけではないことから、表記学社を「我が国で最初の統計学会」ということは、必ずしも間違えであるとは断言できないと考えられる。少なくとも日本統計学会は、日本学術会議法に基づく指定を受けた団体としては、我が国で最初の統計に関する学術研究団体である。

また、藪内武司「日本における中央統計団体の軌跡：「東京統計協会」の結成とその展開」（関西大学「経済論集」第36巻第5号（1987年2月））によれば、「統計学が移植学問として導入されて間もない明治の早い時期に、官庁統計機構の創設と前後して、すでに二つの統計団体が結成されている。すなわち、「表記学社」と「製表社」（「東京統計協会」の前身）とがそれである。」「これらの団体は、いずれも純然たる民間の統計結社としてスタートし、その後長く、前者は統計研究団体として、後者は中央統計団体として併行しながら、わが国統計学の発端期における統計の理論ないしは技術の進歩、発達に多大の寄与をなした。」としています。

表記学社は、「明治九年二月、有志十余名「スタチスチック」研究ノ為一社を興し、杉亨二君ヲ推シテ社長トナシ…「スタチスチック」ニ関スル論議ヲ開キタリ」とされ、「明治十一年二月社則ヲ改メテ「スタチスチック」社ト號シ（稱し）…」としています。明治19年3月に議定されたスタチスチック社規約によれば「本社ハ同志結合シ「スタチスチック」ノ学術ヲ普及スルヲ以テ目的トス」（規約第1条）、「本社ハ毎月…講談会ヲ開キ「スタチスチック」ノ学理方法ヲ研究ス…」（規約第2条）、「本社ハ毎月一回記事報告及ビ「スタチスチック」ノ実務ニ関スル討議並ニ其論說ヲ編纂シテ印刷シ社員ニ頒ツ（わか）」（規約第4条）とされています。⁵

東京統計協会は、その定款によれば、「本会ハ統計学術ノ進歩及普及ヲ図ルヲ以テ目的トス」（定款第1条）とされ、同協会定款施行規則によれば「①毎月講話会ヲ開クコト、②毎月統計集誌ヲ発行スルコト、③会員ノ質問ニ応シ、必要ノ事項ヲ調査スルコト、④統計ニ関スル書冊ヲ発行スルコト、⑤演説会ヲ公開シ、若ハ講習会ヲ開クコト」（施行規則第1条）とされています。①の講話会は「会員相会シ統計上ノ講話ヲ為シ、或ハ各種ノ問題ヲ研究スルモノトス」（施行規則第2条）、②の「統計集誌」は「統計上ノ論説表記及本会ノ記事等ヲ掲載シ、会員ニ限り無料ヲ以テ之ヲ配付ス」（施行規則第2条）とされています。

ちなみに、明治19年5月7日の改進黨新聞の記事「統計学研究のスタチスチック社」によれば、「…その（スタチスチック社の）主意は、スタチスチックの学術が盛んに我国に開くるやうになりたき事（第一）、スタチスチックを実際に運用する智識の開くる様になりたき事（第二）の二條ありて、彼の東京統計協会は實際を主にし、是（スタチスチック社）は学理を主にする積もりにて、お互いに連絡して、統計学の効用を求むるものなりと云ふ。」とされています。⁶

スタチスチック社の規約、東京統計協会の定款などから、スタチスチック社は我が国で最初に機関誌を発行した統計学会、東京統計協会は我が国で最初に機関誌を発行した統計結社とみることができるように思います。

4 我が国で初めての統計に関する専門誌は？

藪内武司の前掲書によれば、「統計集誌」を「實質的にわが国初の統計雑誌」とし、その脚注で「わが国で初めての「統計」関係の専門誌は、大蔵省統計寮から、『統計雑誌』第1号として、1876（明治9）年12月に刊行されているが、その後の経過は不明である（廃刊の公算が大きい）。したがって、『統計集誌』をもって、實質上の本格的な「統計雑誌」が創刊されたとみなしてもよいだろう。」としています。ただ、そのように推定する理由については分かりませんでした。

藤元直樹「幕末・明治初期雑誌目次集覧」（国立国会図書館）⁷によれば、「統計雑誌」（1号（明9.12）統計寮）」について「外国の統計、経済書から有用な記事を紹介することを主目的とした雑誌。」であるとし、「2号以降の刊行については不明」とされています。また、同資料において、1

⁵ 【参考資料】スタチスチック雑誌第1号

⁶ 新聞集成明治編年史. 第6巻

⁷ <http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/3051558> (国立国会図書館デジタルコレクション)

号の所在源情報については、国立国会図書館には所蔵がなく、東京大学法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫に所蔵があるとされています。

ちなみに、財務省図書館における「統計雑誌」の所蔵は確認できませんでした。また、「統計雑誌」の2号以降の刊行の有無についても分かりませんでした。

そこで、東京大学法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫が所蔵する「統計雑誌」（1号（明9.12）、統計寮）を閲覧したところ、本文22頁の冊子でした。前掲の「幕末・明治初期雑誌目次集覧」によれば、「統計雑誌」（1号）は147～148頁とされ、頁数が一致しません。いずれにしても、「統計雑誌」（1号）は、頁数について不明な点はあるものの、原本が存在することが確認できました。その複製物については、同文庫の許可を得て総務省統計図書館の蔵書としました。

以上のことから、大蔵省統計寮の「統計雑誌」は我が国で初めて官公庁が刊行した統計に関する専門誌（第1号に続く号の刊行は不明（廃刊の公算が大きいとみられる）で、東京統計協会の「統計集誌」は我が国で初めて統計結社が刊行した統計に関する専門誌で、スタチスチック社の「スタチスチック雑誌」は我が国で初めての統計学会誌であると考えられます。

なお、「統計集誌」（明治13年創刊）、「スタチスチック雑誌」（明治19年創刊）に次いで刊行された民間統計団体の「統計」に関する雑誌には、経済統計社「経済及統計」（明治22年（第1号）～明治24年（第31号）、主幹：呉文聰、編輯委員：横山雅男）⁸があります。

5 おわりに

東京統計協会が刊行した「統計集誌」とスタチスチック社が刊行した「スタチスチック雑誌」（のちに「統計学雑誌」と改題）は、いずれも我が国の統計や統計学に関する歴史をひもとく際の貴重史料になります。このため、統計図書館のレファレンス業務の重要な情報源となっています。

なお、明治期に創刊された経済雑誌の刊行状況については、金沢幾子「明治期経済雑誌年表」⁹が参考になりました。同資料に「統計集誌」と「スタチスチック雑誌」も掲載されており、同資料のあとがきで「つぎつぎとあらわれる雑誌に明治のエネルギーを見る思いがしました」としています。

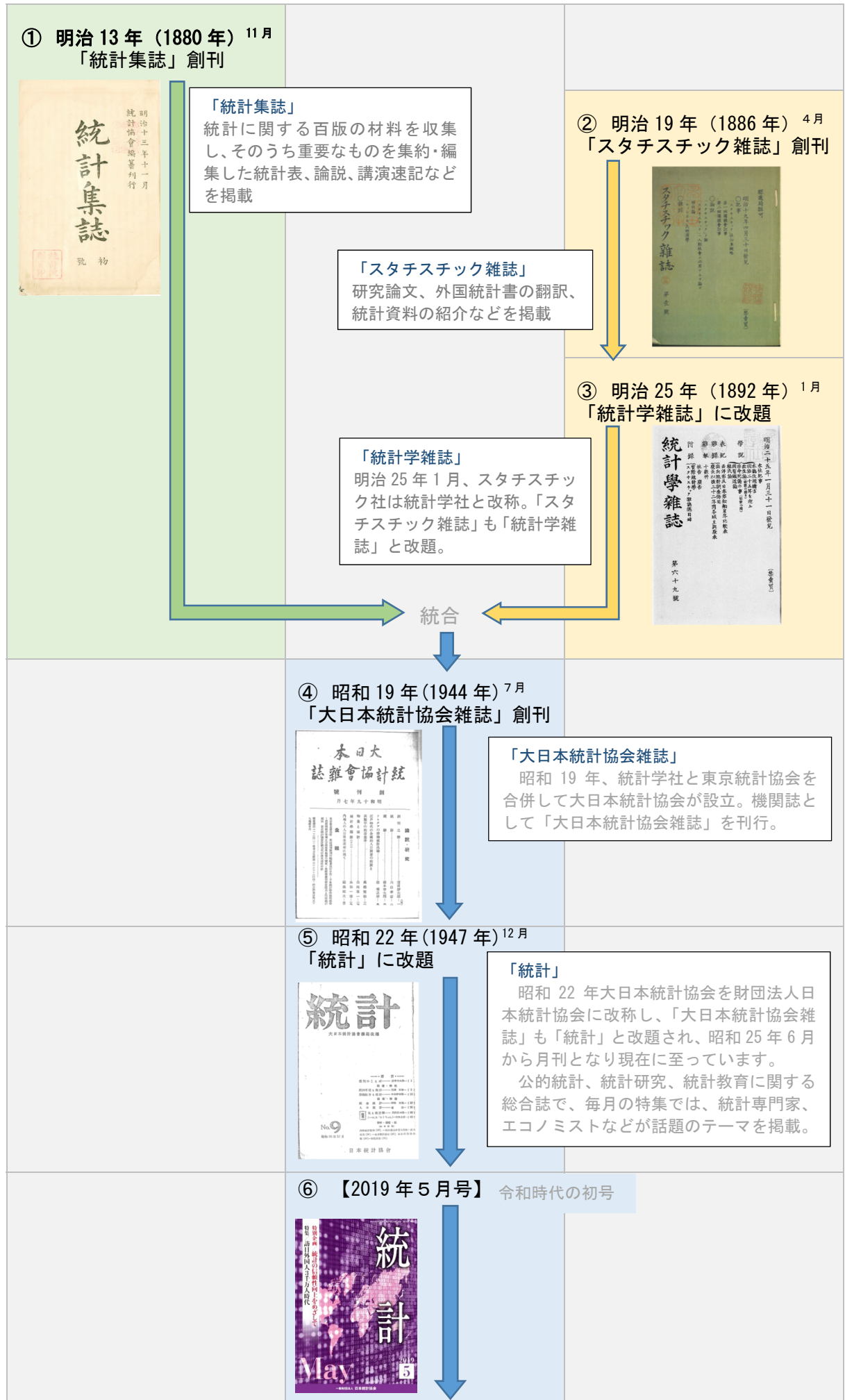
【あとがき】

民間統計団体であるスタチスチック社（のちの統計学社）や東京統計協会は、明治・大正期において、機関誌の出版、講演会の開催等を通じて統計の理論や技術の進歩に大きな貢献をしたほか、政府や衆議院、貴族院に国勢調査の建議・陳情などの国勢調査実現のための促進運動や多くの統計家の育成を通じて統計の発展にも寄与しています。こうした活動も奏功し、大正9年（1920年）に第1回国勢調査が実現しました。

令和2年（2020年）に実施する第21回国勢調査は、第1回国勢調査の実施から100年の節目を迎えます。今後とも未来の礎を築いていくという国勢調査の社会的利益は普遍的なものであり、明治・大正期における民間統計団体の活動があったからこそ、100年の節目を迎えることができたのだと再認識しました。

⁸ 【参考資料】 蕨内武司「日本統計学史における呉文聰」（関西大学経済論集）<http://hdl.handle.net/10112/14749> 「経済及統計」は、国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1614916>

⁹ 金沢幾子（一橋大学図書館）「明治期経済雑誌年表」掲載サイト：京都大学学術情報リポジトリ https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/79785/1/ade_21_1.pdf



【画像】①③～⑥：総務省統計図書館所蔵、②：早稲田大学図書館所蔵

【参考】「統計集誌」、「スタチスチック雑誌」、「統計学雑誌」、「統計」等の利用案内

区分	閲覧方法
「統計集誌」	
明治13年(1880年)11月(初号)～昭和19年(1944年)6月(第754号)	国立国会図書館デジタルコレクション (欠号あり) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1617074 ※国立国会図書館／図書館送信参加館で閲覧可能 (欠号) 第513号～第520号、第522号・第523号、第525号・第526号、第529号～第531号、第533号、第535号～第537号、第548号、第551号、第684号～第702号 総務省統計図書館で閲覧可能 (原本(合本)又は複製版)
「スタチスチック雑誌」	
明治19年(1886年)4月(初号)～昭和24年(1949年)(第68号)	国立国会図書館デジタルコレクション http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3567626 ※国立国会図書館／図書館送信参加館で閲覧可能 ・初号～第44号：(表紙なし) ・第45号～第68号：(表紙あり) 総務省統計図書館で閲覧可能 ・初号～第32号：複製物のみ(表紙なし) ・第33号～第44号、第45号～第56号、第57号～第68号：合本(各号の表紙あり)
「統計学雑誌」 (スタチスチック雑誌を改題)	
明治25年(1892年)1月(第69号)～昭和18年(1943年)12月(第690号)	国立国会図書館デジタルコレクション http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1614574 ※国立国会図書館／図書館送信参加館で閲覧可能 総務省統計図書館で閲覧可能
昭和19年(1944年)1月(691号)～昭和19年(1944年)6月(696号)	総務省統計図書館で閲覧可能 (原本及び複製物)
「大日本統計協会雑誌」	
昭和19年(1944年)7月～昭和21(1946年)年7月	総務省統計図書館で閲覧可能 (複製物)
「統計」 (「大日本統計協会雑誌」を改題)	
昭和22年(1947年)12月～平成12年(2000年)12月	国立国会図書館デジタルコレクション (欠号あり) http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2895593 ※国立国会図書館／図書館送信参加館で閲覧可能 (欠号) 昭和25年6月～昭和33年3月 総務省統計図書館で閲覧可能 (原本又は複製物)
平成13年(2001年)1月～最新号	総務省統計図書館で閲覧可能